

～教員おすすりめ本～

No. 16

薬学部 創薬科学科
杉浦 麗子



『いま、希望を語ろう :
末期がりの若き医師が家族と見つけた「生きる意味」』

ポール・カラニシ 著
田中文 訳

【先生からのコメント】

全米 100 万部を突破したニューヨーク・タイムズ 1 位の世界的ベストセラー、邦訳。
著者ポール・カラニシは 36 歳、脳神経外科医。
スタンフォード大学で英文学の学士号と修士号、さらには、ヒト生物学の学士号を取得し、ケンブリッジ大学で科学および医学の歴史・哲学の博士号を取得した。イエール大学メディカル・スクールを首席で卒業し、アルファ・オメガ・アルファ名誉医療協会の会員となった。その後、スタンフォード大学に戻り、脳神経外科の研修のかたわら脳科学の博士研究員として研究に携わり、アメリカ脳神経外科学会の最高賞を受賞した。
その彼が、2013 年、末期がんと診断される。
そこから、著者と妻が死に至るまでの希望を捨てず、医療現場への復帰をめざし、夫妻の子供を望み、死の直前まで書いた前向きな生の記録を綴ったもの。



『免疫が挑むがんや難病 : 現代免疫物語 beyond』

岸本忠三, 中嶋彰 著

【先生からのコメント】

外敵のみならず、「内なる敵」がんや難病にも、免疫はここまで戦える。
驚くべき免疫のパワーと医療創薬への応用について、学生や一般人にも理解しやすく魅力あふれる筆致で描かれた傑作。
「がん」「難病」治療の常識を一変させた発見の数々!免疫の異物への攻撃は樹状細胞の抗原提示から始まり、過剰な攻撃を抑える免疫寛容には、制御性 T 細胞や免疫チェックポイント分子がかかわっていた。これらの発見がパラダイム・シフトとなり、いまや免疫療法は、がんや難病の治療においても「切り札」として期待されはじめている。免疫の第一線の研究者の発見をひもときつつ、免疫世界の最前線が一望できる傑作ドキュメント。

2017 年 10 月 6 日
近畿大学中央図書館